

プレイフルな砂遊びのこども学

Playful Sand Art

この数年「プレイフル・サンドアート」と称するワークショップのプロデュースを行いながら、日本のあちこちを駆け回っている。これは、砂に水を含ませて押し固めたり刻んだりしながら、いろいろな造形を楽しむ、わくわくドキドキの遊び心に満ちた砂遊びだ。小さな子どもたちはもちろんのこと、小中高校生、大学生そして大人まで、だれもが夢中になる。

砂を使った造形はサンドクラフト、あるいは「砂像（さぞう）」などと呼ばれ、作品の完成度を競う内外の大会がある。最初の写真は2008年9月、世界大会のメッカの一つともいえるカナダのハリソン・ホット・スプリングス（Harrison Hot Springs、バンクーバーから東へ約100キロメートルの小さな村）というところで開催されたチャンピオンシップでの作品である。いずれも、とても砂で作られたとは思えないほどの精巧さと美しさ、迫力をもつ。

一方、砂遊びの面白さというのは、砂像の出来映えもさることながら、何かを作ろうとする過程、あるいは砂に触れているその瞬間にこそあるといえる。プレイフル・サンドアートは、まさにその楽しみを共有することが目的であり、作品の完成度を問うものではない。これまでのワークショップで共通することは、砂遊びに取り組んでいる誰もが笑顔にあふれていることだ。たとえ、制作途中で砂が崩れても、悲鳴や喚声の後に聞こえてくるのは大きな笑い声である。また、自分なりの形を創りあげようと砂の固まりに向かう姿は、幼い子どもといえども素敵なアーティストそのものである。

そんな楽しい砂遊びの機会を少しでも多くの人たちに提供したいという思いから、ワークショップの開催を重ねてきた。そもそも私がなぜ砂遊びに興味を持つようになったか。それはおよそ20年前、親に遊んでもらうことをせがんでばかりいた3歳の娘を公園の砂場に連れて行ったとたん、一人で1時間近く遊び続けたことに始まる。

一体砂遊びの何が子どもの心をひきつけるのか。また、そもそも砂が多量に盛ってあるだけの砂場という遊び空間は、一体誰が最初に考えついたものだったのか。このような疑問が頭をかすめ、それ以来、砂場の歴史と子どもにとっての砂遊びの意味を探ることが私の大きな課題となった。

たかが砂場、たかが子どもの砂遊び。されど、そこには子どもの成長や発達、今日の遊び環境を見直す意外な側面を見出すこともできた。その一端をお伝えしたい。

1. なぜ、砂遊びか（歴史的視点）

（1）ドイツにおける砂場

かつてドイツには「砂は最良のエducator」という言葉があった¹⁾。それが為か、いわゆる砂場の原初的な姿は、今からおよそ200年前のドイツにさかのぼることができる。原初的な姿というのは、それが最初から子どもの砂遊びを目的に作られたかどうかは定かでなく、幼児学校の園庭を覆う敷き砂が結果として子どもの遊びの対象と思われるからだ。

1830年代半ば頃、新教派の牧師フリートナー（Theodor Fliedner, 1800–1864）は、当時としては画期的なイギリスの幼児学校を見学し、心を動かされて帰国した。彼はすぐにドイツ国内に同様の幼児学校を建てていく。それらの施設にはイギリスで学んだように、回旋塔やボール遊びのための屋外遊び場が付設された。だが、ただ一点イギリスと大きく違った部分があった。イギリスでは遊び場全体をフラッグストーン（flag stone）と呼ばれる薄くスレートされた石で覆うことが理想とされていたのだが、フリートナーのそれは全面に細かな砂が大量に敷かれたのだ。地質的にみてドイツでは石よりも砂の入

手が容易かつ安価であったと考えられる。今それが子どもの遊びを目的とした「砂場」であったかどうかの確証はないのだが、子どもたちが身近な砂を使って遊び始めたことは容易に想像できる。

ドイツで砂遊びを本格的な子どもの保育活動に取り入れたのは、1870年代、民衆幼稚園を開設していたシュラーダー・ブライマン（Schrader Breymann, 1827-1899）という女性であった。彼女は子どもが砂で遊ぶことの意義を積極的に認め、幼稚園だけでなくベルリンの全ての公立公園に砂場とともに子どもの遊び場を作ることを時の皇帝に進言していた。そんな彼女は、砂遊びのもっとも重要な意義を「自由な遊び」であるとした。つまり、子どもたちは自分自身のなかに遊ぶ力を持っており、それが砂遊びにおいて大いに発揮されるというのである。

このことについては少し解説を要する。実は当時の幼児教育における「遊び」というのは、子どもの自発的な活動というよりも、ある発達的な目標に向かって保育者が子どもを導いていくべきものと考えられていたのだ。特に幼稚園の創設者フレーベル（Froebel）が考案した遊具「恩物」（積み木の原型ともいわれる）を用いた厳格な遊びの指導法が彼の後継者たちによって説かれていた時代である。そんななかで、子どもが自由に遊ぶことのできる砂遊びの重要性に着目したブライマンの主張は画期的であった。

（2）アメリカの砂場とプレイグラウンド運動

砂場はやがてドイツからアメリカに伝わる。それは、ボストンで活躍していた女性医師ザクルシェフスカが故郷ベルリンに里帰りをした際、子どもたちが公園の砂場で遊んでいる姿を見つけたことに始まる。彼女はすぐに同様のものを設置すべきと、マサチューセッツ州緊急衛生対策協会の友人に手紙を送った。この組織は、ボストンのスラム街に暮らす住民の生活改善と子どもたちの健全育成のための活動に取り組んでいたが、1885年、さっそくザクルシェフスカの提案を受けてノースエンド地区に大きな砂場が設置された。

砂場には多くの子どもたちが集まり、砂を掘り、山をつくり、歌を歌い、楽しく遊んで家に帰っていった。それまで問題行動も多かった子どもたちが、有り余るエネルギーを遊びを通して健康的に発散していくことに、大人たちは大きな価値を見出した。砂場はすぐにボストン市内のあちこちに作られ、砂場とともに他の遊具を組み合わせた遊び場が全米中に広がっていった。これが後にプレイグラウンド・ムーブメントと呼ばれた画期的な遊び場設置運動の始まりである。後年、バトラーは「健全なレクリエーションを行うことは、人格をつくるのに役立つ²⁾」と賞するが、小さな砂場が大きな社会運動の引き金となったのである。

一方、アメリカの幼児教育における砂場は、当初、かたくななフレーベル主義のもとでその普及は遅々としていた。教師主導の保育を行う幼稚園のなかには、砂場はおろか園庭さえない幼稚園までがあったという。しかし、徐々に進歩的な教育実践家や研究者たちが子どもの自由な遊びの重要性を主張した。とりわけ科学的な児童研究の先駆けとなったスタンレー・ホール（Stanley Hall, 1844-1924）はその急先鋒であったが、彼は自分の子どもとその友達が毎年夏休みにくり広げる砂遊びを克明に観察し、次のように述べる。

砂あそびには、勤勉な努力、見通しをもった運営、道徳、地理、数学等のあらゆる教科の要素が含まれている。もしもそれらがバラバラに、学校の課業のように教えられたとしたら、結果は無駄が多く、混乱したものになってしまうだろう。ここには完全な精神の健康と統一がある。バラバラで魂を崩壊させるような学校のカリキュラムが与える以上の多様な内容が含まれている。多様な興味と活動

を統合させる砂遊びは、教育として理想的である。教育においては、理想的なものほど実際的であり、実際的なものは理想的なものである³⁾。

ほぼ手放しの砂遊び礼賛である。ホールは遊びを通した子どもの想像力と創造性、そして社会性といった人間的な諸力の発達過程に注目し、それは何よりも自由な精神に満ちあふれた遊びによってこそ開花すると主張した。そして砂遊びはまさにその最たるものと評していたのであった。

(3) 日本における砂場

日本で最初の幼稚園は、1876（明治9）年に設立された東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園であった。はたして、そこに砂場は存在したか。

否、である。やはり日本の幼児教育も硬直化したフレーベル主義のもとで始まったことにより、保育者を模範とする行為を子どもたちがまねるというやり方が当時の「遊び」だった。

日本における砂場の設置は明治30年代半ば以降の幼稚園に始まる。当時、子どもを間近に見ていた保育者たちのなかでは「随意遊戯」と呼ばれる子どもの自発的な活動の大切さに対する意識が高まり、アメリカからの砂場に関する情報流入とも相まって、砂場及び砂遊びは新しい保育を象徴するかのようになり一気に広まった。同時期、日本に広がり始めた児童公園においても徐々に砂場が設置されていく。

大正期には砂遊びに対する新たな視点も見受けられる。先の附属幼稚園の主事で日本の幼児教育の礎を築いたともいわれる倉橋惣三は、砂遊びを自然物との接触という点からもとらえていた。曰く「都会幼稚園の幼児に、つとめて自然物に接せしめたいことはお互いの平常希望して居る所、苦心して居る所である。しかも、右如き容易な方法（砂遊び：筆者注）で、その目的の一部が達し得るとは愉快なことではないか（後略）⁴⁾」と。すでに大正時代において自然に対するこのような保育要求があったこと、そして倉橋が動植物だけではなく砂をも自然の範疇に含めていたことは興味深い。

砂場はその後、幼稚園や保育園の両保育施設、そして児童公園等においてその設置が義務化されていくが、今日、多くの大人たちにとっても幼少期の遊び場として砂場を共通にあげることができるのは、このような経緯があったからである。

(4) 今日の砂遊びをとりまく状況

自明とも思われる子どもの遊び（場）にも歴史があった。そこには次のようなことを学ぶことができる。第1に大人の視座から子どもをとらえるのではなく、子どものことは子どもから学ぶべきであるということ。第2に子どもとは自らの中に自発的創造的な活動の力を持っている存在であるということ。そして第3に、そのような子どものために大人や社会がすべきことは、安心安全な遊び環境をつくって子どもの自発的活動を保障するということ。砂場はそのような子ども観、遊び観に支えられながら歴史的に発展してきた遊び環境であったのだ。

ひるがえって現代の様子を見るならばどうだろう。荒れたまま放置されている公園の砂場は決して少なくなく、公園のリニューアル時に砂場が撤去されてしまうことも多い。その理由としては、犬や猫による砂場の汚染という衛生上の不安や維持管理の手間や費用といった問題がある。それに加えて、保護者が、子どもが汚れることを極度に嫌がるという傾向も強くなっている。さらに、幼稚園や保育園においてさえ、汚れる遊びよりも、より知的な活動を重視する傾向から子どもの砂遊びを禁止することまで起きているという。

もちろん、衛生への不安には相応の対策が講じられるべきであるが、これはあまりに安易な砂遊びの

否定であり、大人主導に過ぎるのではないだろうか。私はこのことを砂遊びへの単なる個人の好悪の問題にとどまらず、歴史的に到達した子ども観・遊び観を失ってしまうような大きな問題ではないかと考えている。いま、子どもが自らの力によって成長していく可能性を再び逆戻りさせてしまって本当によいのだろうか。

「砂まみれ、泥だらけで遊ぶのは子ども時代の特権である⁵⁾」

これはボストンの砂場設置に貢献した一人ケイト・ガネット・ウェルズ (Kate Gannett Wells) の言葉であるが、現代の子どもたちの権利の喪失はあまりに大きいのではないだろうか。

2. 砂遊びの魅力 (発達の視点)

子どもはなぜ砂遊びが好きなのか。砂遊びの何が子どもの心をそこまでとらえるのか。また、砂遊びは幼い子どもから大人まで、年齢を問うことなく誰もが楽しめる遊びでもあるのだが、それは一体なぜなのか。

この数年、0歳児からの砂遊びの観察や大人向けのワークショップを通してこのことを考えてきた。そこから見えてきたことは、砂という自然素材のもつ特質と砂場という独特の空間が、いずれの年齢に対してもそれぞれの成長や発達の度合い、興味や関心、経験に応じた遊びの要素を提供 (アフォード) しているということである。各対象者はその要素に自らの身体や感情、思考をぶつけるが、それが「遊び」という行為となって表れる。このことを表1のような仮説として表してみた。砂遊びは大きく5つの発展段階をもつが、それぞれの段階における内容は次の段階へのベースとなって引き続き発展し続ける。このことを前提に、砂遊びの魅力について考えてみたい。

(1) Fase1. 砂との直観的出会い

生まれてまだ1年たっていない0歳児。この小さな子どもたちはどのように砂との出会いをするのだろうか。初めて園庭に出た8~9ヶ月の赤ちゃんたちは、裸足の足が地面に触れただけでも泣き出したり、嫌がったりすることが少なくない。そんな時、保育士はよく、子どもにじっと砂を見せている。手のひらにのせたり、その砂をこぼして見せたり。また、カップに砂を詰め、それをひっくり返して砂型をつくって見せる。砂という素材は瞬時にしてその形を変え、子どもはその視覚的变化を目の当たりにすると同時にずっと砂に手を伸ばし、砂場に足を踏み入れる。

砂は状態によって微妙な感触の違いを子どもに与える。乾いた砂、湿った砂、水と混ざり合った砂、粒の大きい砂、小さい砂。また手足や体を埋めることで感じる砂の重さや暖かさなど。

砂はまた、子どもの体を支える大きな環境ともなる。0歳児であればお気に入りの場所に座り続けたり、はいはいをして移動したりすることもできる。平地での歩行もおぼつかない1歳児は、柔らかく起伏のある砂場を注意深く踏みしめながら歩き、自分の背丈ほどの大きな砂山向かって一歩一手を慎重に運びながら頂上を目指す。砂は、子どもの体をそのまま受けとめながらも、それぞれの子どもに応じた課題を課す。そのなかで子どもは自らの身体を意識し、環境への振る舞い方を身につける。

感覚的・身体的な砂と出会い。これが砂遊びの始まりである。

(2) Fase2. 砂で遊ばない砂遊び

1歳前後から2歳児期にかけて「砂で遊ばない砂遊び」とも呼べる特徴が見られる。これはどういうことか。たとえば積み木遊びならば子どもの手は絶えず積み木に触れている。ところが、砂遊びの場合、子どもたちの片手もしくは両手は、何らかの物を持っていることが圧倒的に多いのだ。そして、物の操

作の対象として砂が存在する。これが「砂で遊ばない砂遊び」である。

もちろん最初は物の持ち方も扱い方も上手ではない。指の力も弱く、手首の返しも腕のひねりもできず、ただ物をつかんで上下左右に振りまわしたり、砂にたたきつけたり。スコップで砂をすくった先から砂がこぼれ落ちていく。しかし、これらの行為も何十回と繰り返す中で、子どもたちは物をまさに道具として活用していくようになる。

あるとき、1歳半の子どもが、砂の上に裏返しになっていたスコップの柄をそのまま握った。と、次の瞬間、子どもは握った片手の中で指をねじってスコップの柄をぐるりと回転させ、スコップのすくう面を上向きにしたかと思うと、もう砂をすくい始めていた。それはあまりにも早い自然な動きであったが、そこに至るまでにはいくつかのステップがある。まず、最初はスコップがどちら向きであろうが関係なく砂をすくおうとする。もちろんうまくはすくえない。次のステップは、もう一方の手を使ってスコップを持ち直す。これはスコップの向きをどうすれば使いやすいかを知っている段階。そして最後のステップが、この片手で柄を「くるり」である。生後わずか1～2年程の子どもがこれほど鮮やかに物がもっている、あるいは発している情報を察知し、その物の特質と自分の身体の動きとを合わせる事ができるようになっている。これは文化の獲得といってもよいであろう。

なお、この段階の到達点として、子ども自身が行う型抜きがある。これは前の段階からすでに周囲の大人や年長者によって、何回も何回も見せられてきた行為である。子どもはこれを1歳過ぎから真似をするようになるが、実際にできるようになるのは2歳前である。つまり子ども自身、物のもつ特質と砂の状態への理解、それから砂を容器に入れるー固めるーひっくり返すーそっと容器を持ち上げるといった一連の運動をスムーズに展開できる身体の動き、そしてもう一つ、できあがりのイメージがあって初めて可能になる行為である。(図1を参照：なくてもよい)

(3) Fase3. 砂で遊ぶ砂遊び

砂で遊ばない砂遊びも、その後次第に砂で遊ぶ砂遊びの場面が変わっていく。つまり子どもたちの手がしっかりと砂に触れ、砂の状態や形などを確かめながら、砂そのものの変化を自分の手で直接に引き起こしていく砂遊びである。たとえば大きな砂山をつくったり、トンネルを掘ったり。

泥だんごづくりでは、子どもは自分の手のひらと指先の感覚を敏感に働かせながら、砂と水のほどよい調合を図り、核となる砂の固まりをつくる。それを両手の間で転がし丸めながら、上からさらに砂をかけ徐々に湿り気を取りながら、お気に入りの一つを作り上げていく。まるで全身の神経が両手の中に集中しているかのようだ。

砂で遊ぶ砂遊びの出現は、手や腕の筋力の増加と、もう一方で手や指先を思い通りに動かすことのできる微妙な操作能力の向上によるものと考えられる。また砂の状態や形状と強度との関係など自然的な法則の経験的理解もベースとなっていく。

(4) Fase4. 想像とコミュニケーションの砂遊び

容器に入った砂やお皿の上の砂型、それはご飯やプリンになってお盆にのせられ、「どうぞ」「いただきます」「あー、美味しかった」という言葉のやり取りとともに、子どもたちの間を行き来する。

電車の模型がいくつも連なって砂場を走り、子どもは運転手あるいは電車そのものとなって砂場一杯に這いつくばりながらそれを押し、引っ張っている。一方では、みんなで大きな砂山をつくり、中腹には穴が掘られ、せっせとバケツで水を運んで流し込む。そこから水路が引かれ、小さなボールが水とともに流れ落ちる。

砂場では子どもたちが多くの言葉を発し、イメージをふくらませ、そしてそのイメージに沿った創造がめまぐるしく展開する。それぞれに役割が分担され、砂場全体が一つの舞台ともなって遊びが展開されていく。

(5) Fase5. アートとしての砂遊び

砂は水を含ませて強く圧力をかけることで、意外なほどしっかりと固まる。それに左官用の木ゴテや金ゴテ、ペンナイフ、スプーンその他台所用品などを使って細工を施すことで、砂の固まりはとてども砂とは思えないような形に変わる。冒頭の写真で見たように、砂は思いもかけない表現素材となるのだ。

サンドアートの面白さは完成度の高い作品もさることながら、自分なりに砂に触れて何かをつくろうとするその過程にこそある。素材としての砂の面白さと触感、自らの思いを形に表現していくときのわくわく感。遊びとアートが融合し、それはプレイフルに満ちあふれた瞬間となる。これこそ、大人も含めて砂遊びが好きな理由であろう。

普段、子どもたちの砂遊びは第3・4段階で終わることが多く、徐々に子どもたちも砂場から遠ざかっていく。そのため、砂遊びは小さな子どもだけが好む単純な遊びだと思う大人も多いようだ。だが、ちょっとした発想の転換と砂場環境、それにこれまで砂遊びには使ったことのないような道具類をそろえるだけで、砂場はもう一度プレイフルな舞台に変わる。子どもたちはこれまで培ってきた身体能力やコミュニケーション力、砂との関わり方をここでもう一步深め、独創的なアーティストへと変身していくのだ。

3. 遊びの環境づくりとワークショップの可能性

砂場の歴史に学び、砂遊びの魅力に触れた私が次にすべきこと、それは砂遊びの環境と機会をできるだけいろいろなところにつくり出し、子どもたちはもちろんのこと大人にも砂遊びの面白さを体験してもらうことである。子どもの遊び環境の悪化は、ひとえに大人や社会の責任であり、大人や社会こそが子どもの遊びの意義や重要性に気づくことが何よりも遊び環境の復活に必要なものであると考えるからだ。

砂浜や町の公園、幼稚園や保育園、小学校の砂場などふだんから砂がある場所だけでなく、砂のないところにも砂さえ持ち込めば、ビルのなかでも屋上でも、都会のどまんなかでも、どんなところもプレイフルな遊びの場に早変わりする。

本当に不思議なことだが、ただ単に大量の砂を置く、ただそれだけのことでそこには驚くほどの子どもや大人がやって来る。そして思い思いに砂と向き合い、自分のなかに眠るアートへの志向に気づき、それを引き出そうとする。会場は会話と笑い、笑顔にあふれ、だれもが「たったこれだけのことで、結構楽しいものだ」という素朴な喜びを見出す。

このような体験をした人たちは、プレイフルな遊びの輪をより大きいものにしようとする。よりよい子育ての環境を求める人たち、幼稚園や保育園、小学校の先生たち、子どもの居場所づくりに取り組んでいる人たち、自然を大切にしたい人たち、これからのまちづくりを考える人たち、商店街や行政の人たち……。 「砂遊び」から始まった人と人とのつながりが、新たなコラボレーションを生み、社会における遊び環境を見直す動きにつながっているのだ。

現代のプレイグラウンド・ムーブメント。それがワークショップ「プレイフル・サンドアート」のミッションである。

文献

- 1) Dragehjelt, H. *Barnets Leg I Sandet*, Tillge's Boghandel's Forlag, Kobenhavn, 1909, p.12
- 2) G.D.バトラー、三隅達郎訳『レクリエーション総説』ベースボール・マガジン社、1962、p.40
- 3) 津守真『子どもの世界をどうみるか』NHK ブックス、1987、pp.198-199
- 4) 倉橋惣三「江戸堀幼稚園の砂箱」、復刻『幼児の教育』第12巻12号、名著刊行会、1979、p.571
- 5) Kaufman, Polly.(ed), *Boston Women's Heritage Trail*, 1991, p.26
- 6) 仙田 満『子どもとあそび』岩波新書、1992、p.10~11